

## 北海道アイヌの「死者用靴」

## —日高東部地域の東方系出自集団に固有の死装束とその周辺—

大坂 拓

- 目次
- 1 はじめに
  - 2 先行研究の到達点と課題
  - 3 分析の方法
  - 4 分類の提示
  - 5 分布の検討
  - 6 I類の分布と東方系/西方系出自集団
  - 7 さいごに

Key Words アイヌ民族 (Ainu)、死者用靴 (Shoes for the dead)、出自集団 (Descent group)

## 1 はじめに

本稿では、アイヌ民族が葬送儀礼にあたって使用する死者の装束のうち、アイヌ語北海道方言でsiampa ker<sup>(1)</sup>などと呼ばれる「死者用靴」について、素材と製作技術に着目した分類を提示し、各類型の分布を明らかにした上で、民族誌記録で特定の類型が「集団」と結びつくとされている事例について、資料の分布との整合性を検討する。

従来、アイヌ民族の物質文化に関する記述的研究は、考古学と文化人類学という二つの立場から進められてきた。考古学的手法によるものは、出土遺物を主な検討対象として超長期的年代幅での推移を論ずるもので、葬送儀礼についても和人墓との違い、擦文文化の墓制との連続性、頭位方向の地域差、副葬品の変遷などが具体的に明らかにされてきた。ただし、分析結果は近世・近代以降に記録された民族誌と対照してその差異を確認するに留まる場合が多く、近代以降の変化については十分に明らかになっていない。

一方、文化人類学の分野では、近年、物質文化の記述的研究は低調であり、最近になってinaw木幣の総合的研究(北原 2014)などが現れているものの、葬送儀礼に関しては1930~70年代の研究結果をほぼそのまま踏襲した記述が多い現状にある。

民族誌は、それ自体が今日では得ることができない貴

重なデータではあるが、研究者が各地の伝承者に「伝統文化」について聞き取った内容を基礎として、「変容」以前の姿を復元するという手法をとっている場合が多いため(久保寺 1956a)、構成された記述は、話者が実際に見聞した内容を含みつつも、話者と研究者の二重のフィルターによって還元された「民族誌的現在」となっている可能性を否定できない。結果として、「伝統的」なアイヌ民族の物質文化に関する認識は、年代差などの情報を欠いた静的「過去」のイメージとなり、いかにして今日のアイヌ民族につながっているのかが見えにくい。

明治期以降、アイヌ民族の物質文化にどのような変容が生じ、またどのような側面は維持されたのか。変化は地域的にはどのような差異があったのか。地域的な差異があったとすれば、その背景は何なのか。これらはアイヌ民族の近現代史を論じる重要な論点となることが予想され、実態に即した研究が急務となっている。

こうした認識から、筆者は考古学の分野で用いられてきた型式学的分析手法を応用し、儀礼用冠、儀礼用刀を佩く際に用いる刀帯の分析をおこない、従来知られていなかった地域差や年代差を明らかにし得ることを、具体的に示してきた(大坂 2016, 2017)。

本稿では、他の民具に比べて保守的な性格が強いことが予想される葬送儀礼に関わる民具を分析対象として選択し、葬送儀礼の地域差、その変容について考察する基礎としたい。

(1) *sisanpa ker* というアイヌ語名称は、更科源蔵による記録(表3: S9)をもとに、北海道静内方言の記載(北海道教育委員会 1991b)によって表記を改めた。他に *raykur ker* という語形が記録されている(萱野 1996)。この場合の *ker* は *ker* の所属形と判断され、特定の死者の靴を意味するものと考えられる。日本語名称は、「死人用靴」など所蔵館により異なった名称で登録されているが、本稿では煩雑を避けるため、「死者用靴」と統一して標記する。



図1 部位名称 (北海道博物館 182474)



図2 未成品 (北海道博物館 182478)



1 葬儀用具一式 (市立函館博物館 749)



2 別糸を用いた結束の事例 (北海道博物館 182473)



3 別糸を用いた結束の事例 (北海道博物館 182473)



4 端部を用いた結束の事例 (市立函館博物館 749)

図3 葬儀用具一式に含まれる事例と結束の方法

## 2 先行研究の到達点と課題

### (1) 名取武光の研究

名取武光は、1931～49年にかけて北海道大学植物園・博物館の前身である北海道帝国大学農学部博物館（1947年に北海道大学農学部博物館に改称）に勤務し、収蔵品の網羅的な記述「北大附属博物館蔵アイヌ土俗品解説」（名取 1934a、b、1935）をまとめた。

葬送儀礼具についても個別の詳細な記載をおこなっており、死者用靴は日高地方のもの1点について写真図版を提示して、経糸にはシナあるいはオヒョウの繊維を撚った糸を三十数本使用し、つま先にあたる部分には、緯糸に黒白の木綿糸を用いて文様を編み出すとした（名取前掲：84-85）。

別頁では、葬送儀礼の全体に関して旭川市近文での事例を紹介する中で、黒と白の「布片で製った草鞋（ケリ）を着せてやる」としている（名取前掲：71）。日高地方と旭川市の二つの地域で認められた差違については、とくに説明は加えられていない。

### (2) 久保寺逸彦の研究

久保寺逸彦は、金田一京助に師事したアイヌ語の知識を背景に、日高西部地域を中心とした地域を対象として豊富な民族誌記述を残している。「北海道アイヌの葬制」（久保寺 1956a、b）では、沙流川流域の二谷国松（1888年生～1960年没）らから聞き取った情報を中心に、多数の文献を渉猟した結果を加え、儀礼の手順やそれぞれの場面で唱えられる祈詞、使用される道具などについて、北海道全域の記録を集成しており、現在に至るまで、アイヌ民族の葬送儀礼に関する最もまとまった記述となっている。

死装束についても品目や製作のタイミング、着用方法など詳細な記述があるが、靴については、項目としてあげられたのみで、「足袋をはかせるような地方では足袋も」と記述されるに留まる（久保寺 1956a：13）。

### (3) 萱野茂の研究

平取町二風谷に生まれ、アイヌ文化の保存・継承に尽力した萱野茂（1926年生～2006年没）は、アイヌ民具研究の画期をなす著作『アイヌの民具』の中で死者用靴を取りあげ、実測図と写真を提示しており、鞣皮繊維の経糸と木綿の緯糸を編んだものと、木綿布に刺繍を施したものがあつたことを指摘している（萱野 1978：311）。

『アイヌの民具』は、萱野が「自分で実際に作って

使った経験を基礎にし、分からない所は先輩の老人方に伺った」（萱野 1978：3）知識を集大成したもので、内容には年代的に萱野自身の生活体験を遡るものも含まれる。巻頭に記された「私が子供のころにはすでにこれら以外に多くの新しい道具があつたものの、「今から百年前までは、シシリムカ（沙流川）・ピパウシ（二風谷）のアイヌ達は、ほとんどこの本に書いてある道具だけで暮らしていたのです」（萱野 1978：3）という言葉からは、和人からの強い文化的影響を受ける以前の、平取町二風谷のアイヌ民族の生活を復元するという筆者の強い目的意識が覗える。

地域的には、沙流川流域での事例を中心としつつ、遺体包装時の紐の使用方法について新ひだか町三石で得た情報を記載するなど（萱野 1978：313）、萱野の居住地をやや離れた地域で聞き取った情報も含まれている<sup>(2)</sup>。

### (4) 課題

萱野による記述ののち、死者用靴に着目した体系的な研究は現在まで発表されていないが、1980年代以降に北海道教育委員会が刊行した民族誌調査記録には、以下の留意すべき報告がなされている。

新ひだか町静内農屋に居住した織田ステノ（1901年生～1993年没）は、死者用靴について、menasunkur〔menas-un-kur／東-の人〕と呼ばれる人々が用いるものは経糸に鞣皮繊維を用いて荷縄と同様に文様を編み込むのに対し、sumunkur〔sum-un-kur／西-の人〕と呼ばれる人々は白い布で製作する違いがあると述べている（北海道教育委員会 1991b）。

menasunkur／sumunkurは、おおむね静内川流域を境界として、東側と西側に居住する集団を指すものと考えられてきた経緯がある（更科 1963）。萱野による記述が沙流川流域での見聞に基づくものだとすれば、静内では鞣皮繊維を用いた死者用の靴が静内川流域より東側に分布すると認識されているのに対し、静内川から西に約30km離れた沙流川の流域では、静内川以東と同様のものも使用されていたと考えることになる。

このように、一見すると矛盾した状況が生じた背景には、menasunkurに属する人物が沙流川流域に婚姻などを契機として移住したことで異なる地域に由来する民具が残された可能性や、話者の世代差の影響など、数多くの解釈が並立しうる。

本稿では、まず現存する死者用靴を素材と製作技術を元に分類するとともに、民族誌記述等と比較検討することで、それぞれの地方差について具体的に明らかにする

(2) 萱野は、1970年代に北海道教育委員会の委託を受け、日高地方各地で口承文芸や生活文化に関する録音調査を行っており、調査地は沙流川流域から西は鶴川、穂別、東は新冠、静内、三石、浦河、類似に及んでいる（北海道教育委員会 1977ほか）。

ことを課題として設定する。

以下では、第一に対象資料を選定し、それぞれの収集の経緯について吟味し、第二に、製作技術と素材の組み合わせから分類群を設定する。第三に、各分類群の地理的分布を検討したうえで、民族誌記述と比較する。

### 3 分析の方法

#### (1) 対象資料の選定基準

対象資料の選定にあたっては、博物館等が刊行している目録類を参照するとともに、複数の機関に対して該当資料の有無を照会して簡易な一次リストを準備したうえで、明確な背景情報が含まれる資料群を中心として調査対象資料リストを整えた。その後、それぞれの所蔵館にて観察ノートを作成し、全56点を分析対象とした属性分析表をまとめた(表1)。

資料は、一対(一足)として収蔵番号が付されている場合も、片側のみで収蔵番号が付されている場合も、1点として数えた。一対で登録されている資料は、鞆皮繊維などを用いて結束されている場合には(図3:2-3)、博物館等への収蔵に先立つ製作・保管の時点から一対として扱われていたものと考えられることができるが、こうした結束が認められない場合には、現在に至る過程でセット関係が整理された可能性を排除することは出来ない。本稿では、現在収蔵されている状態での組み合わせを採用することとしたが、中には、一対となっている資料の特徴が一致しないものも存在するため(表1:33・36)、こうした場合には属性分析表の備考に記すこととした。そのほか、「埋葬用具一式」などの名称で登録されている中に含まれる事例は(図3:1)、抽出して1点として数えた<sup>(3)</sup>。

対象資料のうち、収集年代・収集地といった背景情報を伴うものは12点(21.4%)である。

#### (2) 対象資料の概要

##### 北大植物園・博物館所蔵資料

対象資料は3点が収蔵されており、いずれも背景情報が失われているが、うち1点(表1:3)は1934年に刊行された「アイヌ土俗品解説」に写真が掲載されており、収集地は「日高」とされていることから、1934年以前に日高地方で収集されたものと考えられることができる。

「アイヌ土俗品解説」刊行時点では、資料点数は1点

とされていることから、残る2点は、その後に収蔵されたものと見なすことができる。加藤克が紹介した「物品監守証書」(加藤 2008:表11)等を参照して背景情報の復元が可能か検討したものの、直接的に対応関係を示す記述は存在せず、「ケリ」や「ワラジ」と記載された資料が死者用靴を指すのか否かについては、判断が困難と言わざるを得ない。

##### 市立函館博物館所蔵資料

対象資料は3点が収蔵されており、うち1点は葬儀用具一式に含まれているもので、1957年以前に収集されたことが判明している(図3:1、図6:4)。収集を担当した人物は八雲町を中心に多くの資料を集めていることが判明しているが<sup>(4)</sup>、この資料の詳細な背景情報は現在のところ不明である。

残る2点は児玉作左衛門が1970年以前に収集し、遺族を通じて1998年に市立函館博物館が収蔵することになったもので、背景情報は欠如している。

##### 北海道博物館所蔵資料

対象資料は38点<sup>(5)</sup>が収蔵されており、前身である北海道開拓記念館の開館準備期間を含む1970~80年に収集、ないし製作を委託したものが32点、2009年に一括して寄贈された資料が6点となっている。

収集年代が最も古いものは、北海道庁文書課資料室から引き継がれた「旧拓殖館資料」(北海道開拓記念館2003)に含まれる1点で、明治~大正期に遡る可能性があるが、具体的な収集年代・収集地は不明となっている。

詳細な背景情報が伴うものは7点で、1971年に新ひだか町東静内の女性から一括して受け入れたもの3点のほか、同年に白老町の女性から受け入れたとされるもの1点がある。また、北海道開拓記念館が製作を委託したものとして、白糠町の四宅ヤエ(1904年生~1980年没)が1975年に製作したもの2点、浦河町の浦川タレ(1900年生~1991年没)が1980年に製作したもの1点が収蔵されている。

このうち白老町の女性から受け入れたとされる資料(図7:2)は、1969年12月に同じ女性が所有した葬送儀礼具を対象に実施された調査の報告には含まれておらず(藤村 1976)、現状では、目録(北海道開拓記念館1981)に記載された背景情報を裏付けることが困難となっている<sup>(6)</sup>。

(3) 古原敏弘氏の個人的教示によれば、新ひだか町ではヤラメスゲ(*Carex lymbyei*)製のゴザを材料にしたカバンayse citarpe/siampa citarpeに脚絆hos、手甲tekunpe、靴ker、荷縄tarなど、葬送儀礼に必要な道具が収められた状態で保管されている事例が多く見られたという。ただし、葬儀の段階で、ヤラメスゲ製のゴザに白木綿布を縫い付けてカバンとして仕上げる事例もあった。

(4) 函館市教育委員会大矢京右氏の教示による。

(5) 他に未登録資料が2点確認されているが、本稿では分析対象から除外した。

(6) 北海道博物館が所蔵するアイヌ民族資料については、現在、資料と収集過程に残された関連文書の調査、照合作業を進めており、作業が進展する過程で情報が追加される可能性は残されている。

その他の30点は個人の収集家を通じて購入ないし寄贈を受けたもので、最多の18点を占める近藤幸吉コレクション、田中美穂コレクション6点は、いずれも日高東部を中心として収集されたものと推定されている。

小嶋コレクションの6点は一括資料目録（北海道開拓記念館 2011）には未掲載で、2017年に正式に登録した。2009年の受け入れにあたって、収集年代・収集地に関する聞き取りは行われていない。寄贈以前に作成された「早稲田台帳」（北海道開拓記念館 2011：53）に記載がある「C45 くつ」に該当する可能性も考えられるが、対応関係を明確にすることはできなかった。その他、今回の分析対象からは除外したものとして、未製品が1点含まれている（図2）。

#### 二風谷アイヌ文化博物館所蔵資料

所蔵資料のうち、重要有形民俗文化財指定資料3点を対象とした。これらは、萱野が1953年頃から収集・製作した1,121点の民族資料に含まれるもので、うち2点（表1：46、47）は、萱野の著書『アイヌの民具』に図版が掲載されている（萱野 1978：311）。

萱野が収集した民具のうち葬送用具については、1960年頃<sup>(7)</sup>に平取町二風谷に居住した人物が旧所有者として記載されているものの、死者用靴3点はいずれも明確な収集年・収集地が不明となっており、平取町二風谷ないし新ひだか町静内で収集された可能性が指摘されている（平取町教育委員会 2003：195）。萱野による民族資料の収集は、少なくとも平取町から新ひだか町静内・三石に及ぶ広い地域で行われていたことが指摘されていることから（平取町教育委員会 2003：125）、ここでの記載の参照には慎重な態度が求められる。

#### 新ひだか町アイヌ民俗資料館所蔵資料

所蔵資料のうち、新ひだか町静内に居住した男性から2006年に一括して寄贈された資料5点を対象とした。寄贈者の男性は新ひだか町静内に居住したものの、親族が浦河町にも居住していることから、資料は新ひだか町から浦河に及ぶ地域で製作された可能性を想定しておくこととする。

#### 浦河町立郷土博物館所蔵資料

いずれも、1978年の博物館設置に伴い、浦河町内で

収集された可能性が想定されるもので、収集の経過などは明らかになっていない。

## 4 分類の提示

### (1) 製作技術の概要

分類にあたっては、本体の素材を基準としてⅠ類（糸）、Ⅱ類（布）に大別し、Ⅰ類については、さらに編みの技法の組み合わせ、緯糸の素材から細別する（表1）。結論の一部を先に述べることになるが、Ⅰ類に見られる様々な細部の違いは、地域差や年代差ではなく、狭い地域におけるバリエーションの可能性が高い。本稿では、技術的なバリエーションを示すためにあえて煩雑な記述をとっているが、不要と思われる向きは4 (3) から読みすすめて構わない。

属性の設定に先立って、死者用靴のうち、鞣皮繊維を素材とするⅠ類の製作技術について触れておく。以下の記述では、文様が編み込まれた部分がある側を「表面」、つま先側にあたる文様が編み込まれた部分を「上」、かかと側を「下」とし、文様が編み込まれる上部を「文様部」、下部を「無文部」と呼称する（図1）。

死者用靴に関する製作技術の記録は存在しないものの、北海道博物館所蔵の未成品（図2）の観察結果に、共通する製作技術を用いる刀帯や荷縄、編袋に関する記録を組み合わせることで、製作工程を復元的に推測することができる。なお、使用する編み具や編みの姿勢などについては前稿（大坂 2017）で詳述したため、ここでは繰り返さない。

未成品では、あらかじめ片足につき36本の経糸を必要な長さ準備している。現在では経糸固定具は付属していないが、文様部の上端付近にエゾイラクサ (*Urtica platyphylla*) とみられる鞣皮繊維が附着していることから、これを用いて経糸固定具に経糸を縛りつけた状態で文様部を編み、文様部の編みが終わった時点で外したものと推定される<sup>(8)</sup>。

その後の工程については、緯糸の編みの始点が裏面上端にあることから（図4：3）、上から下に向かって編み進めたことは明らかである。甲にあたる部分から下部では緯糸を折り返しながら連続させる、1段毎に切断する、二つの手法が併存する場合などがある<sup>(9)</sup>。

(7) 個別の資料についての記述では1955年頃（平取町教育委員会 2003：195）。

(8) 筆者が2017年に実施した新ひだか町での聞き取り調査では、このタイプの死者用靴を使用する際には、別途用意した靴紐を取り付け、甲の部分に編み上げるといった情報が得られているほか、新ひだか町出身の個人が所有した資料の中に、鞣皮繊維と白木綿布をより合わせた靴紐が付属する事例が存在することを確認している。ただし、こうした靴紐は各地の博物館収蔵資料には含まれていないため、本稿での分析対象は死者用靴本体に限定することとした。

(9) 経糸固定具を外さない状態で無文部を編むことも可能であり、製作者の意図と関係なく、現在までに至るいずれかの時点で経糸固定具が失われた可能性もある。



1 技法 A1 (浦河町立郷土博物館 604)



2 技法 A1 (北海道博物館 23053)



3 技法 A' 1 (新ひだか町アイヌ民俗資料館 10327)



4 技法 A' 2 (北海道博物館 33078)



5 技法 B1 (北海道博物館 33081)



6 技法 B2 (北海道博物館 72133-6)



7 技法 F (新ひだか町アイヌ民俗資料館 10326)



8 技法 F (北海道博物館 23379)

図4 編みの技法 技法A・B・F



1 経糸2本毎の技法A'1 (北海道博物館 23054)



2 一段毎に目をずらすもの (北海道博物館 22185)



3 幅を広げる方法 (新ひだかアイヌ民俗資料館 10324)



4 幅を広げる方法 (北海道博物館 23055)

図5 技法A'1のバリエーション

## (2) 属性の設定

### 緯糸の編みの技法

編みの技術分類及び関連する用語は、前稿（大坂2017）で刀帯の分類にあたって採用したものを基本的に踏襲するが、無文部に主に用いられる編みの技術は、文様部の編みの技術と基本的に同一ながら、緯糸の間隔を広くあけることが一般的なため、細分名称を設定する。

#### 技法A1・A2

前稿で示した定義を踏襲する。技法A1では緯糸の交差方向によって編み目の傾きが変異するが、本稿の分析対象資料では、編み目は例外なく右下がりとなる（図4：1）。

#### 技法A'1・A'2

技法Aとほぼ同一ながら、各段の間隔を広くあけるもの<sup>(10)</sup>。技法Aと同じく、段単位の交差方向の変異から技法A'1（図4：3）と技法A'2（図4：4）に細分する。

技法A'1では、分析対象資料に含まれる45点のうち、編み目が右下がりとなるものが44点（97.8%）と圧倒的多数を占める。技法A'2の資料は2点と例外的で、うち1点（表2：32）は一对のうち片側の一部のみが技法A'2となっているものの、大部分は技法A'1が用いられている。もう1点（表1：38）も技法A'1と技法A'2が併用されており、技法A'1の部分では編み目が右上がりとなる特異な事例である。

つま先側にあたる上部では経糸2本毎（図5：1・2）、下部にかけて経糸1本毎（図5：3・4）に編むものがあり、下部の幅を広げることを目的にしたものと推測される<sup>(11)</sup>。

#### 技法B1・B2

前稿で示した定義を踏襲する。技法B1では緯糸の交差方向によって編み目の傾きが変異するが、本稿の分析対象資料では編み目は例外なく右下がりとなる（図4：5）。

(10) 刀帯や荷縄の場合には緯糸の間隔が密な物から広くあけるものまで幅広いバリエーションが存在しているように、技法Aと技法A'の区分には中間的な状態を示す物が多数存在する。ただし、このことは両者の区分が不可能なことを示すものではなく、基本的に同一の技法を用いたバリエーションとして細分するのが適切と考える。

(11) 下部にかけて幅を広げる方法としては、他に、二つ折りにした糸を挟み混んで経糸を増やした事例がある（表1：35）。

表1 属性分析表

No.	収蔵機関	収集者	分類	資料番号	収集地	製作者	所蔵者	収集年	収蔵年	本体素材		編み(文様部/無文部)							
										糸	布	A1/A'1	B1/A'1	B1/F	B1/A'2	B2/A'1			
										I	II	a	b	c	d	e			
1	北大植物園・博物館	-	I a1類	10633						○		○							
2			I b1類	10634						○			○						
3			I b2類	10456	日高					1934年以前	○			○					
4	市立函館博物館	-	I b1類	民族0749					1957年	○			○						
5			児玉作左衛門	I b2類	H10-51-28-01				1929~1970年	1998年	○			○					
6				I b2類	H10-51-28-02				1929~1970年	1998年	○			○					
7	北海道博物館	-	I b2類	11236					1970年	○			○						
8				22185	白老町?		T.A?		1971年?	○			○						
9			I c2類	23378	新ひだか町東静内		T.T		1971年	○				○					
10				23379	新ひだか町東静内		T.T		1971年	○				○					
11				23380	新ひだか町東静内		T.T		1971年	○				○					
12			I e2類	72133-2	浦河町	浦河タレ				1980年	○							○	
13			II類	53171	白糠町	四宅ヤエ				1975年		○							
14				53172	白糠町	四宅ヤエ				1975年		○							
15			近藤幸吉	I a1類	23053					1971年	○		○						
16					23061					1971年	○		○						
17					23063					1971年	○		○						
18				I b1類	23058					1971年	○			○					
19				I b2類	23050					1971年	○			○					
20					23051					1971年	○			○					
21	23054							1971年	○			○							
22	23055							1971年	○			○							
23	23056							1971年	○			○							
24	23057							1971年	○			○							
25	23059							1971年	○			○							
26	23060							1971年	○			○							
27	23062							1971年	○			○							
28	23064							1971年	○			○							
29	23065						1971年	○			○								
30	23066					1971年	○			○									
31	23067					1971年	○			○									
32	I d2類	23052					1971年	○						○					
33	田中美穂	I b2類	33079					1972年	○			○							
34			33080					1972年	○			○							
35			33081					1972年	○			○							
36			33082					1972年	○			○							
37			33083					1972年	○			○							
38	I d2類	33078					1972年	○						○					
39	小嶋慧子	I b2類	182472					2009年	○			○							
40			182473					2009年	○			○							
41			182474					2009年	○			○							
42			182475					2009年	○			○							
43			182476					2009年	○			○							
44	182477					2009年	○			○									
45	二風谷アイヌ文化博物館	萱野茂	I b2類	NAH-M-19910990				1992年	○			○							
46			I e2類	NAH-M-19910988				1992年	○							○			
47			II類	NAH-M-19910989				1992年		○									
48	新ひだか町アイヌ民俗資料館	-	I b2類	10323	新ひだか町静内		U.T	2006年	○			○							
49				10324	新ひだか町静内		U.T	2006年	○			○							
50				10325	新ひだか町静内		U.T	2006年	○			○							
51				10327	新ひだか町静内		U.T	2006年	○			○							
52	I c2類	10326	新ひだか町静内		U.T		2006年	○				○							
53	浦河町立郷土博物館	-	I a1類	603						○		○							
54				606							○		○						
55			I b2類	604							○			○					
56				605								○			○				



緯糸素材 (つま先)		経糸本数	備考
鞆衣	木綿糸		
1	2		
○		26	つま先緯糸：鞆皮、甲緯糸：鞆皮
○		36	つま先緯糸：黒染鞆皮+白鞆皮、甲緯糸：鞆皮
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮
○		36	つま先緯糸：黒染鞆皮+白鞆皮、甲緯糸：鞆皮、死装束1式のうち1点
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮
	○	36	つま先緯糸：紺木綿+白木綿
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、経糸の一部に木綿糸を使用
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：木綿
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：木綿
	○	28	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：ガマの葉の端部、経糸：ガマの葉の端部、製作委託品の死装束一式のうち1点
—	—	—	木綿布、製作委託品の死装束一式のうち1点
—	—	—	木綿布、製作委託品の死装束一式のうち1点
○		32	つま先緯糸：黒染鞆皮+鞆皮、甲緯糸：鞆皮
○		28	つま先緯糸：黒染鞆皮+鞆皮、甲緯糸：鞆皮
○		52	つま先緯糸：黒染鞆皮+鞆皮、甲緯糸：鞆皮
○		44	つま先緯糸：黒染鞆皮+鞆皮、甲緯糸：鞆皮
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮、経糸の一部に木綿糸を使用
	○	36	つま先緯糸：紺木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿+赤木綿、甲緯糸：鞆皮
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮、片方のみ
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮、片方のみ
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮、片方のみ
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮、片方のみ
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮、鞆皮及び木綿糸の素材が異なり一対で製作されたものか疑わしい
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮
	○	36	つま先緯糸：紺木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮、片方のみ（鞆皮および木綿糸が33080の一方と酷似しており一対で製作された後セット関係を入れ替えた可能性あり）
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮、片方のみ
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：木綿
—	—	—	木綿布、つま先部分に刺繍
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮
	○	36	つま先緯糸：白木綿糸+黒染木綿糸、同コレクションの荷縄に酷似
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮
	○	36	つま先緯糸：黒木綿+白木綿、甲緯糸：鞆皮
○		22	つま先緯糸：鞆皮、甲緯糸：鞆皮、つま先に黒染鞆皮を結びつける
○		34	つま先緯糸：鞆皮、甲緯糸：鞆皮
○		36	つま先緯糸：黒染鞆皮+白鞆皮、甲緯糸：鞆皮
○		36	つま先緯糸：鞆皮、甲緯糸：鞆皮、つま先に黒木綿布を絡ませる

技法F

経糸に対して、緯糸を縫い針を用いて縫い止めたと推測されるもの。緯糸には鞣皮繊維を用いるもの（図4：7）と木綿糸（図4：8）を用いるものがある。

表2 技法の組み合わせによる分類項目の設定

属性名称	編みの技法（文様部／無文部）
a	A1/A'1
b	B1/A'1
c	B1/F
d	B1/A'2
e	B2/A'1

緯糸素材（つま先）

鞣皮繊維を用いたものと木綿糸を用いたものがある。死者用靴に用いられた鞣皮繊維は、刀帯等と比べて比較的鮮明な組織が観察できるものが多く、肉眼観察の所見では、多くはシナノキ (*Tilia japonica*) の内皮を素材としているものと見られる<sup>(12)</sup>。

(3) 属性の組み合わせによる分類

対象資料56点のうち、本体が糸を素材とするⅠ類は53点（94.6%）を占め、布を素材とするⅡ類（図8：3・4）は僅か3点（5.4%）である。

Ⅰ類は、属性の組み合わせから以下の6細分を設定する。

■ I a1類（図6：1・2）

文様部が技法A1、無文部が技法A'1で製作されるものうち、つま先部分の緯糸が鞣皮のもの。対象資料のうち6点が該当する。

■ I b1類（図6：3・4）

文様部が技法B1、無文部が技法A'1で製作されるものうち、つま先部分の緯糸が鞣皮のもの。対象資料のうち3点が該当する。

■ I b2類（図7：1・2）

文様部が技法B1、無文部が技法A'1で製作されるものうち、つま先部分の緯糸が木綿のもの。対象資料のうち36点が該当する。

■ I c2類（図7：3・4）

文様部が技法B1、無文部が技法Fで製作されるものうち、つま先部分の緯糸が木綿のもの。対象資料のうち4点が該当する。

■ I d2類（図8：1）

文様部が技法B1、無文部が技法A'2で製作されるものうち、つま先部分の緯糸が木綿のもの。対象資料のう

ち2点が該当する。

■ I e2類（図8：2）

文様部が技法B2、無文部が技法A'1で製作されるものうち、つま先部分の緯糸が木綿のもの。対象資料のうち2点が該当する。

5 分布の検討

(1) 分布図の作成

前節で設定した各分類群の関係を検討するために、背景情報を有する資料12点を対象として、分布図を作成した（図9）。

分布図からは、Ⅰ類10点のうち9点が日高東部の新ひだか町～浦河町に集中していることが分かる。残る1点は、胆振東部の白老町で収集された可能性がある資料である。

Ⅱ類は2点のみで、いずれも北海道東部の白糠町で製作されたものである。

以下では、民族誌記述に見られる死者用靴の地域的特徴と本稿で作成した分布図との整合性を検証する。

(2) Ⅰ類の細分の相互関係

Ⅰ類については、前節で緯糸の編みに用いられた技法、及び文様部の緯糸の素材から6細分した。本節では、この6細分が地域差・年代差を反映するか否かについて検討を加えておく。

地域差の検討

6細分のうち、収集地が明らかな資料10点の内訳はI b2類5点、I c2類4点、I e2類1点となっている（図9）。これらの分布は、先に述べたように、白老町で収集された可能性がある資料1点を除き、いずれも日高東部の狭い範囲に集中している。

I b2類は、本稿の分析対象資料となったⅠ類の中で最多の36点（94.6%）を占める。背景情報が明らかなものうち4点が含まれる新ひだか町静内アイヌ民俗資料館所蔵資料は、3（2）で述べたように静内～浦河のいずれかの地域で製作されたものと見られ、製作地をより細かく絞り込むことはできない。

I c2類は、資料数が4点（7.5%）と少なく、うち3点は東静内の個人から一括して収集されている。残る1点は静内アイヌ民俗資料館所蔵資料に含まれており、文様や素材の質感など、東静内で収集された資料と酷似している（図7：3-4）。このような高い類似性は、製作者が同一、ないし極めて近い関係にあったことを示す可能性

(12) ただし、鞣皮繊維の同定に関する客観的分析方法の確立は今後の課題であり、本稿では踏み込んだ記述を避けることとした。

Ia1 類



1 収集地/収集年不明 (北海道博物館 23053)



2 収集地/収集年不明 (北海道博物館 23063)

Ib1 類



3 収集地/収集年不明 (北海道博物館 23058)



4 収集地/収集年不明 (市立函館博物館 749)

図6 死者用靴の分類 (1)

I b2 類



1 静内 / 2006年 (新ひだか町アイヌ民俗資料館 10327)



2 白老? / 1971年? (北海道博物館 22185)

I c2 類



3 静内 / 2006年 (新ひだか町アイヌ民俗資料館 10326)



4 収集地 / 収集年不明 (北海道博物館 23378)

図7 死者用靴の分類 (2)

I d2 類



1 収集地/収集年不明 (北海道博物館 33078)

I e2 類



2 浦河/1980年委託製作 (北海道博物館 72133-2)

II 類



3 白糠/1975年委託製作 (北海道博物館 53171)



4 白糠/1975年委託製作 (北海道博物館 53172)

図8 死者用靴の分類 (3)

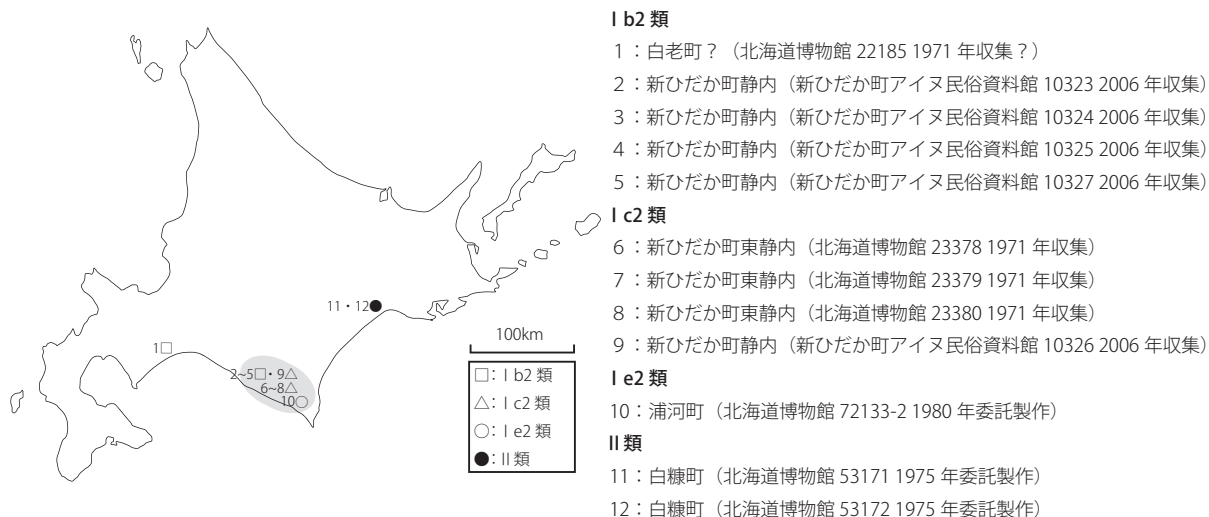


図9 背景情報を有する資料の共時的分布

がある。

ただし、極めて類似した資料が二つの異なる地域に残された過程を解釈するに足る情報は不足しており、I類の細分について、日高東部の中でのマイクロな地域差や系統が反映している可能性をこれ以上検討するのは難しく、立ち入った解釈を加えることは控える。

#### 年代差の検討

対象資料の収集年代は、いずれも1970～2000年代に集中しており、製作年代は委託製作品を除けば不明となっている。

製作年代の上限を直接的に示す背景情報は得られていない。日高地方東部では、死者用靴は葬送儀礼のために事前に準備されているという記録があるため（表3：D3）、製作から使用までの間に、ある程度の時間が存在することになるが、基本的には死者が出るたびに使用される性質のものであり、宝物の一種である刀帯のように1世紀を超えるような年代幅で製作年代が遡るものが伝世する可能性は低いものと考えられる。

文様部に用いられる緯糸の素材は、おおむね靱皮繊維から木綿糸へと変遷した可能性が想定されるものの、サイズがほぼ等しい場合には、素材を除く属性—経糸の本数や技法に差異が認めがたいものもあり（図6：4、図7：1）、緯糸に靱皮繊維を用いる資料が木綿糸を用いる

資料よりも古いと判断する積極的な根拠に乏しい<sup>(13)</sup>。もちろん、わずかな製作年代の違いを含む可能性は否定できないが、木綿糸の入手環境の違い—製作者の貧富の差など—が関与している可能性を視野に入れておく必要がある。

ここでは、I類は素材や編みの技術が共通する刀帯I b4類やI b5類（大坂 2017：26）、荷縄I b3類<sup>(14)</sup>と近い、1870～1910年代を前後する時期には製作されていたものと推測しておきたい。

製作年代の下限については、技法B2の存在が鍵となる。刀帯の分析では、1950年代以前に収集された資料には技法B2は全く含まれておらず、日高地方東部では1970～80年代を境に多用される技法の転換が起こったことが明らかになっている（大坂 2017：26-28）。

本稿の対象資料では、技法B2が用いられるI e2類は1980年に委託製作された資料1点に限られる<sup>(15)</sup>。技法B2への技法の転換を基準とすれば、技法A1、B1で製作された資料は1970年代以前に製作された可能性が高い。

2006年に寄贈された静内アイヌ民俗資料館所蔵資料には技法B2が含まれていないが、これは1970年代以前に製作されたものが、その後、新たに製作されたものが追加されない形で40年以上保持されていた可能性を示唆する。

(13) 刀帯の分析では、概ね靱皮繊維から木綿糸の多様へと変遷したことが推定されたが、文様に木綿糸と靱皮を併用するI b4類と、木綿糸のみで編まれるI b5類については、完全な年代差とみなすことはできなかった（大坂 2017：26）。この点については、2017年5月13日に、弘前大学関根達人先生より同時代の入手環境の差異についても慎重な検討を行うよう、あらためてご教示を賜ったことを明記し、感謝申し上げます。

(14) 本書掲載「アイヌ民族の荷縄」を参照。

(15) 前稿での刀帯の分析では、対象資料の限界から、年代差の根拠として本稿のI e2類についても言及しているが（大坂 2017：27）、その後の調査で、国立民族学博物館が所蔵する同一の製作者による刀帯が技法B2を用いていることを確認していることから、議論が循環論法となることは回避できる。ただし、刀帯の無文部を技法A1、文様部を技法B2で編んだ資料も存在していることから、その変化の過程は漸移的なものであった可能性がある。

### (3) I類の分布に関わる民族誌記録の検討

I類のうち、日高東部の集中部を離れ、白老で収集された可能性がある資料が1点存在しており、分布図上で「迷点」をなしている。また、萱野の著作にI類が掲載されていることから、沙流川流域で使用されていた可能性についても検討しておく必要がある。以下では、文化人類学的調査による民族誌記録を参照し、この問題の整理を試みる。

検討にあたっては、更科源蔵によるフィールドノート『コタン探訪帖』（弟子屈町立図書館所蔵）、並びに北海道教育委員会が実施した調査報告を参照し、関連記述を集成した（表3）。

死者用靴に関する記述を地域別に整理すると、胆振地方では、虻田で「アツシの布」を用いた履物を使用した（表3：S8）、幌別で「足ニ巻ク白布」を用いた（表3：C1）という記述がある。隣接する日高地方西部では、平取町荷負本村で「足に白足袋をはかせ」とされ（表3：D5）、新冠でも「足に白を巻き」（表3：S6）という記述が見える。これらの記述から、胆振～日高地方西部は、II類の分布圏であったことが確認できる。

北海道東部では、十勝地方で「靴も白いさらし」を用い（表3：D6）、標茶町塘路では靴も脚絆も黒布で製作する（表3：S5）するとされており、色の選択に違いはあるものの、II類の分布圏であったことは疑いない。

一方、日高地方東部では、新ひだか町東静内で「死者の履物」を「オヒヨウ、科の皮の縄を糸でとじたもの」という記述があり（表3：S9）、I類が使用されていたことは明らかである。

I類とII類の分布圏の西側における境界は、新ひだか町静内周辺にあったことも確認できる（表3：D2）。

1942年に没するまで、平取町二風谷を中心に調査をおこなったN.G.マンローは、葬送儀礼についてもまとまった記述を残しており、脚絆や手甲は事前に製作され、死まで保管されていることを紹介しているが（Munro 1962：126）、死者用靴に関する記述はない。仮に沙流川流域でI類が使用されていたとすれば、事前に製作するものとして言及されていた可能性が高く、死者用靴が触れられていないことそのものが、やや消極的ながら、沙流川流域にI類が存在しなかった可能性を示唆する。

### (4) I類の分布に関わる博物館所蔵資料の検討

ロシア民族学博物館には、1912年にV.N.ヴァシリエフが北海道日高西部の平取町で収集した約800点の資

料が収蔵されており、大部分が図録に掲載されている（荻原他編 2007）。コレクションには、墓標2点、葬送儀礼用細紐<sup>(16)</sup>2点、葬送儀礼用広紐7点、死者用手甲の部品1点、死者用脚絆1点および部品2点、死者用の可能性がある荷縄などが含まれており、葬送儀礼に関連する品目も収集の対象となっていたことは疑いないが、死者用靴I類は収集されていない。

北海道博物館には、N.G.マンローが収集したと考えられている葬送儀礼用具一式があり、ゴザ製のカバンとともに、葬送儀礼用荷縄、死者用脚絆、死者用手甲などが含まれているが、この中にも、死者用靴I類は含まれていない。

言うまでもなく、資料の欠落には慎重な解釈が必要だが、V.N.ヴァシリエフ、N.G.マンローによる網羅的とも言える収集に死者用靴I類が含まれていないことは、20世紀前半の段階で、沙流川流域でこのタイプが使用されていなかったとする推測を支持する。

### (5) 分布図上の「迷点」の解釈

I類・II類の境界を超えた西側に位置する白老町では、葬送儀礼の場面で撮影した写真で足に白足袋を履かせていることが確認され（アイヌ民族博物館 1988：78）、少なくとも、20世紀前半にはII類の分布圏であったと考えられる。

白老で収集された可能性があるI類（図7：2）は、観光業への従事を目的として、渡島・胆振・日高など各地から多数のアイヌ民族が集まった地域で、他地域に由来する民具そのもの、ないし情報が受容された可能性や、収蔵の過程で背景情報に錯誤が生じたことも視野に入れておく必要がある。

平取町については、前節で確認した平取町荷負本村での情報は口承文芸の語り手としても著名な西島テル（1896年生～1988年没）によるもので、萱野よりも30歳年上の話者から聞き取られた情報として重要である。また、萱野自身が幼少期の経験として、白足袋を左右逆に着用されるのを目にしたことを記していることから（萱野 2000：189）、20世紀前半には、沙流川流域はII類の分布圏であったことは疑いない。

萱野が『アイヌの民具』に、自身が目にした白足袋ではなく死者用靴I類を掲載した背景には、萱野が白足袋の使用を和人の文化的影響による「変容」と判断したうえで、自身のフィールドワークを通じて得た知見を「変容」以前の姿とする仮説を立て（図10：上段）、記述に

(16) アイヌ語沙流方言でutokiatなどと呼ばれ、「墓標巻紐」などと訳されることもあるが、葬送儀礼の場面で水桶の運搬や食器の結束にも使用されるため、葬送儀礼用細紐と呼称する。アイヌ語沙流方言でpara murirなどと呼ばれる紐は、遺体包装及び遺体の担ぎ棒への固定に使用されるため、葬送儀礼用広紐と呼称する。

表3 死者の装束に関する民族誌記述

更科源蔵『コタン探訪帖』

番号	頁	地域	調査年月日	
S1	1-22	美幌	25.10.16	顔をかくす ナンカセシケツプ 着物を普通にかける 死衣 ライクルミツプ 湯カンしない キナ (シアンバツプ) に包む
S2	1-53	塘路	25.10.20	死衣は破いて着せる 破くのは作った人の手あとを消す ボンクツも切つてやる
S3	4-18	斜里	26.4.18	着物はその人の一番よいの黒衣着物を着せ、背中の縫ひ目を四ヶ所切つて着せ、 ホシやテッカヘシも同じ布でつくり紐は着物の裾を切つて用ひる 頭にも顔のかくれるまでの三角のコンヂをかぶせるが、つくったものをかぶせず 布を顔の前で合せ一針づつ糸を抜いて縫ひ合せる
S4	4-20	標茶虹別	26.4.21	着物は黒衣でホシ、テクンベ、コンヂをつくり鉄できつて着せる
S5	8-12	塘路	28.5.21	女は黒布を顔にかけ 男は黒布を三角に顔の前で合せ 布で目と鼻の間をしばり (女も) タテ縞の黒い布で着物をつくり アワセをつくり左前にし胸と 脚のあたりを黒いヒモでしばり <u>黒ケリもホシも黒</u> テバ 女はボンクツをとり布で ボンクツをつくりしめさし 普通のボンクツは墓のわきに置く
S6	8-70	新冠	28.6.29	着物はアツツシ 白で顔をかくし手も足ものばし、 <u>足に白をまき</u> 、半分のtekunbeをつけ 右の方に男に kaparamipをかけ
S7	8-146	音更	28.7.10	nangaunbeというふアツツシの布で顔をかくし ケリのかほりにアツツシでつくつ たものをはかせる。夏はあの世界では冬だから特別はかせる アツツ皮はめつたにつかはない
S8	12-105	虻田	35.6.23	死者の履物 死人にアツツシの布で袋のやうな指のないkeropといふ履物 (男は右結でひと結び、 女は左結で一結び) 棺に入れる前に少し破る。下駄や草履を入れるときは片方の 緒を切る。
S9	17-155	東静内	37.11.17	死者の履物 (sianba keru) <u>オヒヨウ、料の皮の繩を糸でとじたもの</u>
S10	18-72	白糠	38.1.31	死装は着物も脚絆もtekunbeも模様なし
S11	19-32	門別	40.11.13	葬 下着は木綿衣 男は左前 女は右前 上衣はkapar imiを上からかける、 顔に晒木綿の布をかける 耳環は男も女ももたせる 男には刀 女に前飾もたす 手に手甲 脛に脚絆 足にkeri

『知里真志保フィールドノート』

番号	頁	地域	内容
C1	CM74-9	幌別 (推定)	1. hos 2. tekunpe 3. 足ニ巻ク白布 ドコモデナイヨニスル 4. nankaunpe,nankamup 白イ布 顔全体一尺四方位アレバ丁度イイ 黒イホソイ布で真中ヲシバツテ両方ヘ垂レル 5. kantutanuハaramnepキセテヤハリ黒布デアrmuyeスル ソレカラ仰臥サセテソノ上cikarkarpeダノkosonteダノ冠セル ソレカラtamaダノsitokiダノ首ニカケニ胸ノ上ニノセテオク



## 北海道教育委員会アイヌ民俗文化財調査報告書

番号	頁	地域	内容
D1	II-74	旭川市	tekunpe:手甲。死人には、白と黒の布だけで作る。
D2	IV-26	静内町 農屋	父はmenasunkurで母はsumunmatであった。男であれば自分もメナシウングル式のkamuy nomiをすることであった。母方の祖父母に育てられた。葬式の仕方でも女が死んだら母の流儀、男が死んだら父の流儀とする。墓標もメナシウングルは男がekimne kuwa「山杖の墓標」女がkancasi kuwa「カンザシ型の墓標」スムングルの男はop kuwa「槍形の墓標」、女はsito kuwa「団子の墓標」である。死装束のmusirやkerも違う。メナシウングルのケルはsaranip「編み袋」のように編んで作り、tar「荷縄」についているような模様をつける。スムングルのケルは白い布切れで作り、keromun「靴に入れる干し草」を入れることもある。
D3	IV-107	浦河町 姉茶	生前から死装束を準備している。cikarkarp「黒い綿布に、黒い糸で刺繍した白布を張りつけたもの」、tekunpe「手甲」、keri「靴」、mour「下着」を用意してketus「カバン型の物入れ」に入れておく。男はケトウシを使わない。急な死で死装束が間に合わない時は他人から借りる。
D4	V-75	美幌町	死装束 (raykur imi) も破る。破壊しないと、そのものはあの世に届かないといわれる。ライクイミは女の人が4、5人で縫う。子供が死んだら、ライクイミの他に何も持たせない。壮年の人が死んだらhos (脚絆)、tekunpe (手甲) を持たせた。
D5	VII-42	平取町 荷負本村	死者に着せる服 (sirkamuppe) は袖を通さずに着せる。裾 (cinki) に少しはさみを入れる。女の場合は白足袋をはかせ、草履を足に置く。着物は仏様になった人が生前大事にしていたものを棺箱 (棺桶) の中に左右に一枚ずつ長いまままたまずに入れる。仏様に着せるものは、ゆかたのような白いさらし木綿の着物で、少し刃物を当てて傷つける。男の死者には腹の上に刀 (emus) を置いていた。昔、祖母 (huci) が亡くなった時、木綿のmourを着せ、その上に模様のついたcikarkarpeを着せた。頭には黒地の鉢巻きみたいなもの (epanup) をつけた (男にはこれをつけない) さらに、なづき (額) を隠すように顔の下までnankamupをする (これは、年寄りだけで男もするが、若いものはしない)。足には黒地に白い布で模様をつけた脚絆 (hos)、手には黒地で白い模様 (morew) のついた手甲 (tekunpe) をつける。男は枕元に置いておある冠 (sapaunpe) と桜の皮 (karinpa) で作った煙管 (kiseri) を棺桶の中に入れる。女性には白い布で袋を作り、その中にタバコ、米、ハサミ、かみそり、針、糸などをいれて袋についたひもで背負えるようにして棺桶の中におく。
D6	VII-100	本別町	死体を包むゴザは、yayankinaでできている。このゴザは生前に自分で用意してあるものだ。母もkinaだけではなく全ての死装束を用意していたが死ぬ前に火事になってしまい皆焼けてしまったのでかわいそうなおこなをした。本人よりも少し早くあの世に行っただけのことだから、それでも良かったと思う。仏さんに着せるものに黒い糸は使わない。脚絆 (hos)、手甲 (tekunpe)、靴 (ker) も白いさらしで作る。頭巾 (konci) もさらしで作る。いっさい黒い糸は使わなかった。korciの時も、ekasの時も白いものばかりだった。死体は顔は全部は隠さない。死装束は裏返しに着せ (kuttoko imi)、前後合わせて、裾口と裾にはさみを入れる。やぶったり (sospa) はしない。
D7	IX-52	千歳市 ウサクマイ	死んだ人に付ける手甲や脚絆 (hos) に刺繍がしてあるのを見たことがある
D8	X-54~	千歳市 ウサクマイ ランコシ	私の見たアイヌ風の葬式は、母の実家のTのじいさん、S氏の母の兄 (「Cのじいさん」父の親戚にあたる) だけだ。teunpe「手甲」、足に巻くもの、hos「きゃはん」などを生前から用意しておく。死者に着せる着物は色変わりの布で2枚作る。赤い糸は用いない。hos「きゃはん」は、下の方は白いさらし、上の方は横縞か、あれば黒を使う。巻くのでは無く、はかせる。袋きゃはんにははかせるのは、huci「祖母」が亡くなった時に見た。年寄りは自分の支度しておくものらしい。奥さんが旦那さんの分も作る。用意していないと恥しい。全部用意しておく。自分が先に死んでも、死装束を残しておいて死ぬらしかった。tekunpeはどんなものでもいい。赤は使わない。着物に模様、襟もつけない。普通に着るものなら縞でもかすりでもいい。昔はhuku ka isam「服もない」、着物ばかりだ。死装束はraykur amipという。死者は白いさらしで顔をおおう。鉢巻でとめる。鉢巻は黒いひもで、名はない。死者の顔の覆いをnankamupという。
D9	XIV-50	標茶町虹別	死んだ人に着せる着物があって、それを縫うとき、糸の末端に結び目を作らなかった。だから、糸を引くと簡単に抜けてしまうのである。また、文様のついていない真っ黒の布で手甲を作った。

※北海道教育委員会の記録でアイヌ語がカタカナ、ローマ字併記されている部分はカタカナを省略した。

取り入れた可能性が考えられよう。

この点については、噴火湾に面した虻田町で死者用靴に靱皮繊維の布を用いたという記録があることから見て、木綿製のⅡ類を使用する地域では、木綿布が使用するようになる以前に、靱皮繊維の布を素材として使用していた可能性が否定できない(図10:下段)。

### (6) 分布図における空白の解釈

(3) で検討した民族誌記録では、日高東部を除く広い範囲がⅡ類の分布圏と考えられたが、実際に収集された資料は僅か2点に過ぎず、博物館収蔵資料の背景情報から、直接的に民族誌記述を裏付けることが出来ない。この問題について筆者は、死装束の準備に関わる地域差、民具の所有者と収集者の意識という2点から説明が可能になると考えている。

北海道東部では死装束は事前に準備されないため(久保寺 1956a, b)、製作を依頼しない限りは収集されにくかったことが予想される。北海道博物館所蔵資料は委託製作品であり、いわば例外的に博物館収蔵品となった事例といえる。

また、白布で足を包んだり、白布を用いて足袋をつくる場合には、葬儀の場面で初めて死者用の靴として形作られ、機能するが多かったものと考えられ、こうした場合、あらかじめ高い水準の予備知識を持った研究者が特別に依頼しない限り、資料の収集対象とはなりにくい。また、白足袋の形で準備されていたとしても、所有者の側からも研究者の側からもアイヌ民族の「伝統的」な民具として認識されにくく、結果としてほとんど収集されなかった可能性も考えられる。

分布図(図9)に空白地帯が生じた要因の一部は、以上のような背景から説明可能だろう。

## 6 I類の分布と東方系/西方系出自集団

冒頭で触れたように、新ひだか町静内では、menasunkurと呼ばれる人びとが死者用靴Ⅰ類、sumunkurと呼ばれる人びとが死者用靴Ⅱ類を用いることが報告されている(表3:D2)。以下では、死者用靴の分布を規定するとされるmenasunkur/sumunkurについて、その性格を確認しておきたい。

### (1) menasunkur/sumunkurに関する先行研究

更科源蔵は、静内周辺を「東方系のメナシウンクル(東方人)と西方系のシュムウンクル(西方人)の接点」(更科 1963:90)とし、「西方人」の範囲を「日高、胆振地方」、「東方人」の範囲を「日高の東半部から東の十勝、釧路、根室、北見と石狩川筋や、日本海岸」としており、祖先伝承等を異にする北海道を二分する地域集団という見方を示した(更科 1977)。

1824(文政7年)に成立した上原熊次郎『蝦夷地名考并里程記』には、シビチヤリ(静内)の項でシビチヤリからポロイツミ周辺までの「蝦夷をまとめてメナシウンクルといふ。即、東のものといふ事。ニイガブよりシラヲイ邊までの蝦夷をシュムウンクルという。即、西のものといふ事」<sup>(17)</sup>との記載があり(佐々木編 1988:54)、menasunkur/sumunkurという集団呼称が19世紀前半に遡って静内地域で用いられていたことが確認できる。

menasunkur/sumunkurの空間的な広がりをもどの程度と見なすかはいくつかの見解があるものの、相対的に大きな文化的境界が静内周辺に位置するとの認識は、河野広道による墓標の研究(河野 1931)や、久保寺による葬送儀礼の研究(久保寺 1956a)などの中でも繰り返し述べられてきた。また、それが17世紀のシャクシャ

#### 〈仮説1〉



#### 〈仮説2〉



図10 分布圏の成立過程を解釈する二つの仮説

(17) 東京国立博物館所蔵資料。利用にあたっては、佐々木利和による翻刻(佐々木編 1988)によった。

表4 西方系／東方系出自集団に関する民族誌記述

更科源蔵『コタン探訪帖』

番号	頁	地域	調査年月日	
S1	7-13	静内農屋	27.9.22	menas un kuru 根室の先から釧路を廻って来た 又木のkuwa simu un kuru 北の方から来た人達 hai un kuru 十勝から山を越したサル、アツガにkotan korした人達
S2	7-16	新冠?	27.6.23	menasi un kuru 私は母はメナシウクルだった menasi un kuruは十勝の方から氷にのつてながされて asipekoroをもつた魚に 助けられ(氷にひつぱられ) それでasipe nokaをkuwaにした
S3	7-18	新冠	27.9.23	この辺はsumu un kuruでopu kuwaである。
S4	8-66	新冠泊津	28.6.29	私達はsumu un kurだ。
S5	10-154	阿寒	31.1.17	釧路と静内人 釧路の人はsi cyupuka un kurといひ静内をpon sicyupukaといふ
S6	12-10	静内農屋	34.9.1	西方人 syum un kurは十勝のパンケシリから来た。
S7	12-33	門別町 新平賀	34.9.4	サルンクル 胆振と日高とは言葉も風習も似ているが新冠までは同じだが、静内は言葉もしき たりもちがふ。

北海道教育委員会『アイヌ民俗文化財調査報告書』

番号	頁	地域	調査年度	
D1	III-31	静内農屋	1983年	ムリルはウサルの壁にムリル カをぶら下げて編んでゆく。スムンクルは十五本、 メナシウクルは十本のムリル カで編んだ。
D2	III-85	静内浦和	1983年	カムイノミはコタンの系統によって異なる。田原ではtoputu un onkami、静内 川の東ではmenasunkur okami、静内川の西ではsumunkur onkamiを行なう。
D3	IV-26	静内農屋	1984年	メナシウクルは静内の浜の方に多く、東静内でも浜手に多かった。農屋にも 二・三軒メナシウクルの家であった。白老もスムンクルだと聞いた。今でも何 かする時にメナシウクルかスムンクルかが問題になる。
D4	IV-104	浦河	1984年	ポン クツの作り方。自分達menas un mat「東側の女」は、糸を5本から6本使っ て作る。ある産婆から聞いた話だが、sum un mat「静内より西方の女」は7~8 本の糸を使う。
D5	IV-113	浦河姉茶	1984年	浦河の辺は皆menas un kurである。新冠以西の言葉はわからない。静内から浦 河までの間はことばが少し違うがだいたい同じ。様似・十勝の言葉はわかる。
D6	IV-113	様似	1984年	様似にはメナシ ウン クルのウタリが多く入っている。だから静内、平取とは言 葉が違う。
D7	IV-113	浦河	1984年	静内はほとんど皆がmenas un kurである。sum un kurは婿に来た人の子孫であ る。新冠から西の方は、sum un kur sar un kur wen sampe kor「スムンクル、 サルウクルの人は心掛けが悪い」と言って行き来しなかったそうだ。



「東」／sum「西」という方角を用いて指し示す用法が生まれ、定着してきた可能性も想定できる。

本稿では、menasunkurとsumunkurを「日高東部地域における『東方系出自集団』、『西方系出自集団』と呼称することとするが、それぞれの出自集団への帰属意識は、静内川周辺を離れるほど希薄になったものと考えられるため、分布範囲を単色で図上に表すことができるような性格のものではない。

日高東部では、静内川下流から浦河にかけて東方系出自集団、静内川上流から新冠にかけて西方系出自集団が多いものと認識されている（表4：D3・5）。議論を死者用靴に戻せば、本稿の分析で明らかになったⅠ類の確実な分布圏は、新ひだか町静内から浦河町の範囲であり、東方系出自集団と意識する人々の居住範囲に関する民族誌記述とよく整合している一方、襟裳岬を超えて道東への連続性は持たない。その他の「出自集団」に特徴的と考えられている要素が持つ空間的広がりとの一致／不一致が、今後の課題となるだろう。

### （3）刺繍による文様を有する死者用靴Ⅱ類

萱野が『アイヌの民具』で提示した死者用靴のうち、Ⅰ点がⅡ類に属することについては既に触れた。

この個体（表1：47）は、木綿布を素材とするものの、つま先部分にはⅠ類に見られる編みの文様を模したと考えられる刺繍が施されているが、現存する他のⅡ類には刺繍による文様が施された事例はなく、民族誌記録にも関連する情報は残されていないため、特異な事例といえる。

こうした資料が存在する背景には、Ⅰ類とⅡ類の境界領域で製作された可能性や、Ⅰ類の製作が衰退してⅡ類に移行する過程が存在した可能性など、いくつかの推測が有りうる。仮に後者のように、Ⅰ類の衰退—つまりⅠ類を製作・使用する「東方系出自集団」の人々の中で、Ⅱ類への移行が一部で進んでいたと考えれば、シナノキ等を素材とする繊維の利用が減少する中であって、死者用靴にも変化が生じつつあったと理解することになる。このような変化を視野に入れた研究も必要となるだろう。

## 7 さいごに

本稿では、素材と製作技術に着目して死者用靴の分類を示し、その分布について論じてきた。結論をまとめると、以下のようになる。

- 1) 死者用靴は、素材から、鞣皮製の糸を用いるⅠ類と、布を用いるⅡ類に大別される。
- 2) Ⅰ類は日高東部に分布する。

- 3) Ⅰ類の分布は、日高東部でmenasunkur東方系出自集団への帰属意識が強い人々が居住する地域と密接な相関が認められる。
- 4) Ⅱ類は日高東部を除く地域に分布するが、現存する資料数が少ない。
- 5) Ⅱ類の資料数の少なさは、事前に準備されにくい複数の要因が存在したことが背景にある。

本稿の結果は、その一部が『アイヌの民具』と異なる記述をなすこととなった。アイヌ民族の文化が急速に変化する中であって、伝統文化の「かつての姿」を書き残し、その復興の可能性を視野に入れて尽力した萱野の業績は大きく、伝統文化のより正確な記述とその先の復興を見据えた萱野が日高東部に分布する死者用靴を自著に盛り込むことになった背景に、多くの地域で葬送儀礼の変容が進行していた中で萱野が巡らしたであろう思索を読み取り、歴史的な評価を行っていく姿勢が求められる。

### 謝辞

本稿をまとめるにあたり、奥田統己、北原次郎太、古原敏弘、高野啓子、藤村久和、安田千夏の諸氏・諸先生よりご教示を賜ったほか、資料所蔵機関の飯岡郁穂（旭川市博物館）、伊藤昭和（浦河町立郷土博物館）、大矢京右（函館市教育員会）、加藤克（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター）、齋藤玲子（国立民族学博物館）、長田佳宏・関根健司（平取町立二風谷アイヌ文化博物館）、藪中剛司（新ひだか町博物館：調査時）の諸氏から多大なご協力を賜りました。末筆ながら記して感謝申し上げます。ただし、存在するであろう全ての誤りは筆者に帰する。

### 引用文献

- アイヌ民族博物館 1988. シラオイコタン 木下清蔵遺作写真集.
- 大坂 拓 2016. 北海道アイヌの儀礼用冠について—北海道大学植物園・博物館所蔵資料の検討—, 北海道博物館アイヌ民族文化研究センター紀要 1: 23–42.
- 大坂 拓 2017. アイヌ民族の刀帯—分類群の共時的分布と通時的分布—, 北海道博物館アイヌ民族文化研究センター紀要 2: 1–32.
- 荻原真子・古原敏弘・ヴァレンチーナ V. ゴルバチョーヴァ編 2007. ロシア民族学博物館所蔵アイヌ資料目録, 草風館.
- 加藤 克 2008. 北海道大学植物園所蔵アイヌ民族資料について: 歴史的背景を中心に, 北大植物園研究紀要 8: 35–91.
- 萱野 茂 1978. アイヌの民具, すずさわ書店.
- 萱野 茂 1996. 萱野茂のアイヌ語辞典, 三省堂.
- 萱野 茂 2000. アイヌ歳時記 二風谷のくらしと心, 平凡社.
- 北原次郎太 2014. アイヌの祭具イナウの研究, 北海道大学出版会.
- 久保寺逸彦 1956a. 北海道アイヌの葬制—沙流アイヌを中心と

して, 季刊民族学研究 20(1・2): 1-35.  
 久保寺逸彦 1956b, 北海道アイヌの葬制—沙流アイヌを中心として—続一, 季刊民族学研究 20(3・4): 54-101.  
 河野広道 1931, 墓標の型式より見たるアイヌの諸系統, 蝦夷往来, (河野広道著作集刊行会 1971, 北方文化論 河野広道著作集 I, に再録)  
 河野広道 1933, アイヌのキケウシパシュイ, 人類学雑誌48(7): 365-375. (河野広道著作集刊行会 1971, 北方文化論河野広道著作集1, に再録)  
 佐々木利和編 1988, アイヌ語地名資料集成, 草風館.  
 更科源蔵 1963, 第三章 アイヌ文化, 静内町史.  
 更科源蔵 1977, アイヌの神話.  
 瀬川清子 1961a, アイヌの伝承聞書, 民族学研究, 25(3): 21-151.  
 瀬川清子 1961b, アイヌの伝承聞書, 民族学研究, 26(1): 67-87.  
 関口明・田畑宏・桑原真人・瀧澤正編 2015, アイヌ民族の歴史, 山川出版社.  
 田村すず子 1996, アイヌ語沙流方言辞典, 草風館.  
 田村すず子 1997, アイヌ語, 日本列島の言語, 三省堂.  
 中川 裕 1996, 言語地理学によるアイヌ語の史的研究, 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 2: 1-18.  
 名取武光 1934a, アイヌ土俗品解説, ドルメン 3(4): 13-25. (1972, 名取武光著作集 I アイヌと考古学(一), に再録)  
 名取武光 1934b, アイヌ土俗品解説(2), ドルメン 3(7): 59-65. (1972, 名取武光著作集 I アイヌと考古学(一), に再録)  
 名取武光 1935, アイヌ土俗品解説(3), ドルメン, 3(11): 19-26. (1972, 名取武光著作集 I アイヌと考古学(一), に再録)  
 服部四郎編 1964, アイヌ語方言辞典, 岩波書店.  
 藤村久和 1976, 民族調査ノート(3) 白老地方の慣習, 北海道史研究2: 82-90.

北海道教育委員会 1977, 昭和51年度アイヌ民俗文化財調査報告書 (無形民俗文化財2).  
 北海道教育委員会 1983, 昭和57年度アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗調査 II.  
 北海道教育委員会 1985, 昭和59年度アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗調査 IV.  
 北海道教育委員会 1986, 昭和60年度アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗調査 V.  
 北海道教育委員会 1988, 昭和62年度アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗調査 VII.  
 北海道教育委員会 1990, 平成元年度アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗調査 IX.  
 北海道教育委員会 1991a, 平成2年度アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗調査報告書 X.  
 北海道教育委員会 1991b, 平成2年度アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ IV アイヌのくらしと言葉 2.  
 北海道教育委員会 1995, 平成6年度アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗調査 XIV.  
 北海道開拓記念館 2003, 旧拓殖館所蔵民族資料コレクション 資料目録 北海道開拓記念館一括資料目録第37集.  
 北海道開拓記念館 2011, 小嶋新三・慧子コレクション資料目録 北海道開拓記念館一括資料目録40.  
 平取町教育委員会 2003, 北海道二風谷及び周辺地域のアイヌ生活用具コレクション 国指定重要有形民俗文化財調査報告書.  
 N. G. Munro 1962, *Ainu: Creed and Cult*.

図版出典

図1~8: 所蔵機関の許可を得て筆者撮影  
 図9~11: 筆者作成

Shoes for the Dead of the Ainu:  
 Spatial Distribution

OSAKA Taku

In this article, Ainu "shoes for the dead" are targeted for analysis, and regional differences are identified by presenting a classification that focuses on production methods and material (Fig. 9).

- Type I a1 : Fig. 6 : 1・2
- Type I b1 : Fig. 6 : 3・4
- Type I b2 : Fig. 7 : 1・2
- Type I c2 : Fig. 7 : 3・4

- Type I d2 : Fig. 8 : 1
- Type I e2 : Fig. 8 : 2
- Type II : Fig. 8 : 3・4

Furthermore, Class I was indicated to belong to a unique class in the eastern Hidaka region connected to a descendant group called *menasunkur* (eastern people) in the region.